

春日部福音自由教会 2020年10月18日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコの福音書 9章14節～29節

説教 「再び立ち上がる」 小野信一牧師

挨拶

おはようございます。昨日は札幌での結婚式に出席してまいりました。関根あかり姉と伊藤裕輔兄が、無事に結婚の誓約をなすことができました。新しい夫婦の出発に立ち会わせていただきました。どうぞ祝福をお祈りくださいますようお願いいたします。今日はこの礼拝堂の中は聞こえていますね、大丈夫ですね？同時配信で聞いている、見ている方たち、音はよく聞こえているでしょうか？先週運動会の日、室内礼拝の音声が大変良くなって、先週の間は機器を取り替えたりして、対処致しました。今日はきれいに聞いている、声が届いていることを願っております。大丈夫そうでしょうか？はい、そうであれば感謝です。あと、今日皆さん礼拝堂にいらっしゃる方は寒くないですか？寒い人（は拳手してください）。一人。（もう一人）。私も私入れて3人ですね。エアコン切っていますので、今日は執事とか、（結婚式に参加したりして）いない方がいるのですけれど、リモコンが壁にありますので、弱くつけるなり、それぞれで調整していただければと思います。

はじめの祈り

今日はマルコの福音書9章14節から29節まで、少し長いところですがけれども聖書が朗読されました。今日はこのみことばから「再び立ち上がる」と題してみことばを取り次がせていただきます。初めにお祈りをささげます。いつも説教の終わりに祈りをしますが、今日は終わりにはしないで、はじめの祈りはすることにしたいと思います。お祈りします。

主よ、あなたにはおできになります。私たちにできないことが。主よ、あなたがお望みになるなら、あなたにはおできになります。ほかの誰にもできないことが。信じます。【信じる】と【疑う】の間を揺れ動く私たちを助けてください。見ずに信じる者とならせてください。再び立つことを信じさせてください。私たち自身が、私たちの愛する家族や国民が、私たちの教会が、再び立てるよう助けてください。再び立てると信じられるよう助けてください。みことばをお語りください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。

1, できない弟子たち

今日のみことばでは、まず弟子たちの姿が見えてきます。その弟子たちは「ほかの弟子たち」と書かれています。12人のうち3人がイエス様と山に登って、イエス様が栄光に輝く姿に変えられた、それを見ていた。その間、残りの9人は山の下にいました。イエス様が3人と戻ってきます。するとほかの弟子たちが群衆、律法学者たちと何やら話をしていました。ここに出てくる弟子たちの姿は、できなかった弟子たちです。ある人がイエス様に助けてほしいと思って息子を連れてきました。でもイエス様がいないのでお弟子さんたちをお願いしたのです。「お願いしましたが、お弟子さんたちにはできませんでした」とその父親はイエス様に訴えます。

ここにできない弟子たちがいます。できない弟子たちが私たちに重なるように思えます。どんな場面、どんなできごと、どんな人だったのでしょうか。

2, 父親と息子、そしてイエス様

「弟子たちと何を論じているのですか」とイエス様が尋ねると、群衆の一人が口を開きました。「先生、口をきけなくする霊につかれた私の息子を先生のところに連れて参りました。その霊が息子に取りつくと、ところかまわず倒します。引き裂きます。息子は倒れて口から泡を吹きます。歯ぎしりして体をこわばらせます。それで先生がご不在でしたので、お弟子さんたちに霊を追い出してくださいとお願いしたのです。しかしできませんでした」。そんな訴えです。

イエス様は「ああ不信仰な時代だ、いつまであなたがたの不信仰と一緒になければならないのか、いつまで我慢しなければならないのか」と言われました。信じることができない、信じ切ることができない、不信仰、神様に信頼する、信じて安心してお任せする、ということができない不信仰な世代。不信仰な人々のことをイエス様は嘆いておられる。そんな場面です。

この一人の父親。名前もないですし、どんな人が背景などは分かりません。とにかく一人の父親が、一人の息子を連れてきて「助けてほしい」と思ってイエス様のところに連れてきた。イエス様に会えずに弟子たちに頼んだ。先ほど読みましたように、ひとり息子は霊が取り憑くと倒れ、泡を吹き、体を痙攣させる、というような状態になる。父親としてどんなに心配だったことでしょうか。どんなに子どものことを思って、「何とかしてやりたい、助けてやりたい、治ってほしい、この状態から助かってほしい」。いわゆる症状と言ってもいいかもしれませんが、そのような状態が起こるたびに「どうなってしまうのだろうか」。もし突然倒れて打ちどころが悪かったら頭を打って死んでしまうかもしれない、大怪我をするかもしれない、いつそれが起こるか分からない。どんなに親として心配だったことでしょうか。

私たちにもそれぞれに、私たちが幼い頃子どもの頃、私たちのことを心配してくれた、思ってくれた親がいました。私たちが大人になっても、心配してくれているかもしれません。そしてまた私たちも親になり、子どものことを思っている、日々心配している、という人もいるでしょう。イエス様は言います。「その子をわたしのところに連れてきなさい」。最初イエス様のところに連れて行きたかった。でもご不在だったので弟子のところに行った。イエス様は改めて言います。「その子をわたしのところに連れてきなさい」。人々は連れてきました。そうすると霊が、イエスを見るとすぐにその子にひきつけを起こさせた。それで彼は地面に倒れました。みんなが見ている前で、イエス様の前でまた倒れた。口から泡を吹きながら転げまわった。

イエス様は父親に尋ねます。「この子にこのようなことが起こるようになってどれくらい経ちますか。どれくらいの時間こういうことで苦しんできたのですか。こういうことが起こって、どれくらいの時間ですか」。父親は答えます。「幼い時からです」。それは最近のことだけではなく、長い時間だったのです。幼い時から

ずっとこうなのです。そして多くの危機があったということを伝えます。「霊は息子を殺そうとします。何度も何度も火の中に投げ込み水の中に投げ込んだのです」。これまで幼い時から長い時間いろんなところを通ってきました。命の危険がありました。恐れがありました。多くの危機がありました。本当に心配だったと思うのです。そして今、父親は言います。「しかしおできになるなら、私たちをあわれんでください。そして助けてください」と言います。長い時間多くの危機があった。火の中に投げ込まれ水の中に投げ込まれ、もうだめだ、もう死んでしまう、命が終わってしまう、というようなところを何度も通ってきたのです。今この息子は、イエス様の前で倒れています。転げまわっています。長い時間を多くの危機を通ったのです。しかし命は守られてここまで来たのです。

今日はこの一人の息子の姿を通して、イエス様が“その子を”と呼んだ、「わたしのところに連れて来い」と言った、そして「この子にこのようなことが起こってどれくらいですか?」、イエス様が“この子を”と呼んだその息子の姿を通して、私たち自身のこと、私たち自身の人生、そして私たちが愛する人心配している人、あなたが心配する人の人生、その人の命のこと、また私たちの教会の命と言ったらいいのでしょうか、教会の歩んできたあゆみを重ね合わせてみたいと思います。

3, 【信仰】と【不信仰】の間に揺れ動く私たち

私たちの人生にも、愛する人の人生にも、いろんなことがありました。でも命はここまで守られてきたのです。「おできになるならあわれんで助けてください。私たちは無力です。どうすることもできません」。“助けたい、助けてやりたい”と思いながら、助けてやる力がないのです。ほかに希望がありません。でもあなたにお願いしたいのです、もしあなたにおできになるならば、あわれんで助けてください。イエス様は言われます。

「できるならというのか。もしできるなら、というのか。信じる者にはどんなことでもできるのに」。父親はすぐに大きな声で叫んで言った、と書いてあります。「信じます。信じます。不信仰な私をお助けください。信じられない私を助けてください」。「信じます」と言うのです。 “信じます”と言いながら、「私は不信仰だ」という。不信仰な私だと知りながらでも、“信じます”と言っている。その両方が私たちにもあるのじゃないのでしょうか。「神様あなたを信じます。あなたにはおできになる。あなたはしてくださると信じます」という一方で、言いたいと思う一方で、「でもだめかもしれない、無理かもしれない、どうしようもないかもしれない」と諦めそうになる。信じられなくなる。その【信仰】と【不信仰】の間に揺れ動く私たちではないのでしょうか。また私たちの中に、同時に信仰と不信仰があるのかもしれない。

イエス様は汚れた霊を叱ります。「口をきけなくする霊、耳を聞こえなくする霊よ、わたしがお前に命じる、出て行け、この子から。二度と入るな!」。イエス様が叱ってくださった。言葉を、力強い言葉を発してくださいました。すると、どうなったか。「すると霊は叫び声を上げ、その子を激しく引きつけさせて出て行った」。すると、その子は動かなくなりました。「その子は死んだようになった」。それで多くの人たちは、「この子は死んでしまった」と言いました。先ほどまでは体が動いていました。転げまわった、と書いてありました。でもここで動かなくなったのです。霊が出て行き、追い出された、解放された、ということのはずですが、死

んだようになってしまったのです。みんなが、周りで見ている人が、「死んでしまったのだ。かわいそうに。残念ながらこの子は死んでしまった」と思ったのです。そのように彼は動かなくなりました。でもそれで終わりではなかったですね。27 節に“しかし”という言葉があります。見えている、目に見えている姿は、もう動かない、もう死んでいる、もう命がない、というふうに見えているのです。でも聖書は【しかし】と私たちに語っています。「しかしイエスが手を取って起こされるとその子は立ち上がった」。その子は立ち上がったのです。一度動かなくなった。でも立ち上がりました。囚われていた人が、霊が追い出された。しかしそれで動かなくなってしまった。解放されたはずなのに、死んだようになってしまった。でもイエス様が手を取った。手を取って起こしたら、彼は起きたのです。立ち上がったのです。終わったように見えた命の再出発のできごとが、ここに記されています。命の再生、再興、再出発です。そういうできごとがこの日ここで起こりました。

4, 今日も同じ神が

今日私たちは、この聖書を読んで「昔こういうできごとがあった、イエス様は昔こんなすごいことをした、こんな凄い力を持った人が昔いたのだ」と思って終わるだけではなくて、その同じ神が、「死にそうな囚われた人、動けなくなっている人、そういう私たちを、私たちの家族を、もう一度立たせてくださるのだ。あの日起こったできごとが今日も起こるのだ」と信じて、このみ言葉を聞き、耳を傾けたいと思います。

「イエスが手を取って起こされるとその子は立ち上がった」。死んだようになった命が再び起き上がることができます。最後のこの段落の最後に、28 節と 29 節では「イエスが家に入られると」と書いてあります。今度は群衆はいなくて、家の中で閉じられた自分たちだけの場所で、イエス様と弟子たちがいます。

そこで弟子たちがそっと尋ねます。「私たちができなかったのはなぜでしょうか。どうして私たちには霊を追い出せなかったのでしょうか」。イエス様は、答えます。「この種のもは、祈りによらなければ何によっても追い出すことができないのだ」。

5, 祈りからはじめよう

できなかった弟子たち、できない弟子たちが、したいと願うことをできない私たち自身と重なるように思います、と最初に申し上げたのですけれども、私たちに欠けているものは何でしょう。

イエス様は、「祈りによらなければできないのだ」って言われました。祈りが欠けているのでしょうか。イエス様も一人になって霊的戦いに向かったことがあったわけです。イエス様も祈っていたのです。ですから私たちも改めて祈りからはじめよう。それが、私たちが今日聖書を読んで「何をしたらいいのでしょうか」ということの、ひとつの答えであると思います。祈りからはじめることです。

祈りって何でしょうか。祈りは神さまとの親しさです。祈りは神様との会話なのですけれど、それに神様との近さ、親しさがそこにある。マルコの福音書が伝えているイエス様の祈りは、一つは父なる神様といつも親しく交わっていたってことです。

もう一つは、最後にゲッセマネの祈りで出てくるように、神の意志に自分の意思を明け渡す、自分の意思を従わせる、ということです。

ですから、祈りは私たちにとっても、神さまとの親しい時であり、また私たちにとって内的な戦い、自分の意思を神様の意思に従わせるという戦いでもあります。

そしてもう一つ祈りは、訴えを打ち明けることです。自分のありのままを晒して打ち明けることです。

皆さん最近こんな風に祈ってますでしょうか。自分の心の思いを、心の深いところにある思いを、神様にさらけ出して、打ち明けているでしょうか。あるいはぶちまけると言ってもいいかもしれませんが、「こんな思いなのです、こんな願いです、でもだめかもしれないと思っています。でもこれが望みです。これが心配です。私の思いを知ってください」と、打ち明ける心を晒して祈っているでしょうか。

例えばですね、旧約聖書の言葉を開きたいのですが、エレミヤ書の20章12節に、こういう言葉があります。「私の訴えをあなたに打ち明けたのですから」。エレミヤはいろんなプレッシャーとストレスと闘いと困難の中で危機の中で、私の訴えをあなたに打ち明けたのです。と言っています。私たちも、ありのままを晒して「見てください。聞いてください。あなたはご存知ですけど、見てください、聞いてください」と祈ることができます。私の訴えを、神様に打ち明けること。それが、祈りです。

いろんな思いがある、助けてあげたいのにできない、力がなくて無力だ、願いもある、恐れもある、その全ての訴えを、心を、神のみ前に注ぎ出すことです。

「心を神のみ前に注ぎ出す」という言い方は、例えば詩篇62篇8節などにあるように、時々聖書の中に出てきます。神様の前に心を注ぎ出す。それが祈りです。正直に思いを包み隠さずに話す、ほかの人に言えないことも“神様あなたに言います、あなたに訴えます、見てください、聞いてください”と、御前で言うことです。

祈りからはじめましょう。祈るならばできると、言えるのかどうか、そこははっきり言えないところもあります。断言できないなと思うところがあります。祈りからはじめて霊に立ち向かう。この世の霊や、悪い霊や人を縛る霊というものがある。「この世の霊」という言葉が新約聖書にありますけれども、この時代の霊とかこの時代の空気ってものもあるかもしれません。そういうものに立ち向かって勝利しなきゃいけない。ですから、立ち向かう方法の一つは、祈りによって勝利するってことですよ。できるならば本当に感謝なことです。

6, イエス様のところに連れて行く

しかし、もうひとつの道は「できないのだ。自分は出来ない、出来てない」と自覚して、イエス様のところに連れて行くことです。「その子を、わたしのところに連れて来なさい」。自分が何とかする、自分が祈りによってそれを突破して何とかする、何とかしてあげる。できればいいのですが、できない時もあるでしょう。その時は、イエス様のところに連れて行くことです。でもどうやって連れて行くのだろう。板に乗せて運んでいくとか、手を引っ張って連れて行くとか、自分の親とか、自分の兄弟とか、自分の子どもを、手を引っ張っ

てイエス様のところに連れて行きたいと思う。でもどうやって連れて行くのだろうか？それもまた祈りかもしれません。私たちが祈って、祈りの中で自分たちの心配する人を、愛する家族を、イエス様の前に差し出していく。

私たちは、間で揺れ動きます。“信じる”と“信じられない”の間で揺れ動きます。

この父親は言いました。「信じます、不信仰な私をお助けください」。私たちもそうです。間で揺れ動く。“信じると思いながら、言いながら、信じられない不信仰な私を助けてください”。これは私自身の叫びでもあるなと思いました。教会の皆さんにとってもそうかもしれません。“期待したい、希望を持ちたい、これを何とかしたい、将来はこうしたい”と思う。しかし一方で、“でもダメかも。自分には無理だ、未来がこうなっていると思えない”、という思いになる。両方あって、両方の間で揺れるのではないのでしょうか。

7, 神の前に差し出すものは

皆さんちょっと二つ質問したいと思うのですが、皆さんが願うことって何でしょうか。神様に願いたいこと、期待したいこと、将来に希望を持ちたいことって何でしょうか。もう一つは、その一方でダメかもしれないって思うこと、できないかもしれないって思うことって何でしょうか。

是非、今それを思い巡らしながら、この礼拝の中でこの説教を聞きながらでもよいので、「神さま、私の願いごとはこちらです、でもだめかもしれないこう思っています」ってこともですね、お話していただきたいと思います。願うことは、何か。だめかもしれないと思うことは何か。あなたの思いを神のみ前で話してください。私たちが、間で揺れ動くものです。イエス様は言われます。「わたしのところに連れて来なさい。“その子”をわたしのところに連れてきなさい」。私たちにとって、皆さんにとって“その子”っていうのは誰のことでしょうか。今イエス様が、「“その子”をわたしのところに連れて来なさい」と言われる。それは誰のことでしょうか。それは私たち自身のことかもしれません。

“この子”とイエス様が言うときに、アブラハムを思い出しました。創世記 22 章で、「あなたの愛するひとり子をわたしにささげなさい」と、イサクのことが言われたのですよね。愛する息子です。私たちにとって愛する人、心配する人は誰でしょう。それを、“この子”としてイエス様のところに連れていく、また私たち自身が自分のことが心配であるならば、自分自身をイエス様のところに連れて行く、持っていくってことでしょうか。そして私たちのこの集まりは、教会と呼ばれる、イエス様を信じる集まりですけれども、イサクをささげるっていうことは、「イサクの子孫として神の民が続いていく約束」をささげることでした。神の民、それは今の私たちの教会だと言ってよいでしょう。その愛するひとり子のような愛する教会もまた苦しむ時、イエス様のもとに連れて行くということだと思えるのですね。

この息子は連れてこられて転げ回り、解放されました。でも動かなくなり、死んだと思われ、再び立ち上がったのです。“その子”は立ち上がりました。旧約聖書イザヤ書の 52 章に「目覚めよ、目覚めよ」という言葉があります。眠っている、動かなくなっている、死んだようになってしまっている神の民に対して、神様が語

りかける。「目を覚ませ、再び立ち上がれ。立ち上がり元の座に着け、エルサレム」と神さまが呼びかけます。神の御名を担う者として立ち、神の栄光をあらわすというのです。

ここは神の民の危機のところを預言されています。5節「わたしの民はただで奪い取られ、悲しみ嘆いている」。神の民が奪い取られ、攻撃され、傷つき苦しむ時、何が起こるか。「わたしの名は一日中、絶えず侮られている」と書いてあります。神さまの名前が周りの人たちから侮られるのです。“彼らの信じる神はその程度かと、神さまが侮られるのです。だから神さまはそのままにされない。「目覚めよ。再び立ち上がれ、元の座に着け」と言われます。私たちは一人一人の人間として、人として神のかたちに造られた者として、神の栄光をあらわしたいと願います。そして民としても集まりとしても、神の民と教会は同じと言ってよいですが、神の名が付けられた民として、キリストの名がつけられた教会として、「立ち上がって生きよ」と、呼びかけられています。

「“その子”は立ち上がった」。死んだようになったものを再び生かす神の驚くべき力が、その身の上に現れました。私たちも一人一人の人間として、またこの神さまに繋がるお互いの集まりとして、主の弟子の集団、また教会として、私たちの無力を通して、私たちの傷を通して、悲しみを通して、また死を通してさえ、死んだと思われるような状態を通してさえ、死んだものを生かす神の力があらわされます。傷ついた者を癒す神の真実が、悲しむ者を慰める神様の慰めがあらわされます。もとの恵みを回復させる、もとの力、もとの使命を回復させる神さまの赦しとご真実がそこにあらわれます。

弟子たちにはできませんでした。私たちにもできないときがあります。人間にはできない。でもイエス様にはできるのです。“私たちには無理です、もうダメです”というところから、イエス様に頼る、イエス様の所に連れて行く、イエス様に触れていただく、イエス様に手を取って起こしていただく、という再生のみわざがはじまっていきます。「できるならば」と言った父親に、「できるなら、というのか。信じる者には何でもできる。信じる者になれ」とイエス様は言われます。

8, むすび

私たちが祈りましょう。私たちが心配している人、家族、この子が。“この子”っていうのは誰でしょう。この子がこの子らしく生きられるようにしてください。この子の人生を生きられますように。神の民の命を戻してください。神の民、教会として生き生き生きられますように。私たちは揺れ動きます。信じる疑いの間で揺れます。でもそういう私たちが変えられるのですよね。「信じます」という者に。完全に「信じます」と言えなかったら、こう言いましょう。「信じます、不信仰な私を助けてください」。この祈りならば、揺れている私たちが祈ることができます。一人の少年が助けられました。いま私たちが同じです。私たちの愛する人も、イエス様によって助けられることができます。私たちの教会も、この日本の教会も、助けられることができる。同じ神が働くのです。未来が見えない時に、見えない時に“信じる”というチャレンジがあります。見えない今、信じましょう。「信じます、不信仰に揺れる私をお助けください」と言って、イエス様のもとに持っていきま

しょう。「苦しむ“この子”を助けてください」。私たち自身を、私たちが心配する人たちを、私たちが愛する教会を、イエス様のもとに持って行きましょう。「苦しむ“この子”を助けてください。信じられない私を憐れんでください。不信仰を乗り越えさせてください。“あなたにはできます”と、信頼する者にならせてください」。

私たちにはできないかもしれませんが。でもイエス様にはできるのです。立ち上がらせることが。「信じる者にはできる、イエス様にはおできになる」と聖書は語ります。主は再び立ち上がらせることができます。信じる者にはできるのです。イエス様にはおできになると聖書は語ります。だから聞きましょう、イエス様の声を。
「その子をわたしのところに連れて来なさい」。